

# 月経不浄観と女性忌避

青ヶ島と宮古島の事例研究を中心にして

上 橋 菜穂子

目次

はじめに

## 一、青ヶ島における月経不浄観の実態

1 概況

2 社会構造

3 宗教の特徴

4 人生儀礼と月経小屋

5 青ヶ島の月経不浄観

## 二、池間島における月経不浄観の実態

1 概況

2 社会構造

3 宗教の特徴

4 池間島の月経不浄観

## 三、宮古島久松における月経不浄観の実態

1 概況

2 社会構造

3 宗教の特徴

4 久松の月経不浄観

## 四、結論

はじめに

月経を不浄なものとし、忌避する意識は世界各地で見出される。これまで、なぜそのような観念が生じたのか、また、なぜその不浄観に地域によって強弱のバリエーションがあるのかということについて、多くの人々がそれぞれの

立場から論じてきた。

それらの論考の中で、結論として最も多く用いられたのは、社会、宗教内における男女の位置関係——特に男性優位女性劣位という構図の意味づけから、もしくは、その構造内における矛盾から月経不浄観が生じたという意見であった。

大森元吉は日本における村落社会構造と月経不浄観の相関関係を探り、いわゆる『東北型村落』よりも『西南型村落』の方が月経不浄観が濃厚であるとした。<sup>(1)</sup> 波平恵美子は『男女間の社会関係における矛盾』が性の不浄観を生むというM・ダグラスの理論を大森の説に当てはめて、『西南型村落』的社会構造が含んでいる内部矛盾（原理的には男性優位でありながら、それが様々な要因に阻まれて一貫した形では社会関係を決定していない）が強い性の不浄観を生じた原因であるとした。<sup>(3)</sup>

また、どちらかといえば西南型である沖縄にほとんど月経不浄観が存在しない理由を『聖の領域と俗の領域』とが明確に分離され、なおかつ聖の領域での女性の優越性、俗の領域での男性の優越性が明確でありその間に矛盾がない』からだとしている。<sup>(3)</sup>

しかし、注意深く各地の月経不浄観の在り方を見てみると、必ずしも『月経不浄観』と『女性不浄観』がイコール

では結ばれていない例が存在しているのである。

ここに、月経不浄観を男女の社会・宗教内での在り方からのみ論じることへの疑問が生じてきた。最初から一つの視点を設定し、そこから結論に至るという方法は月経不浄観の考察の場合、一見有効に見えながら、常に女性劣位という観念に引き摺られて全体を見とおす視野を欠く危険性をはらんでいる。むしろ様々な事例を詳細に調べ、比較することによって、もっと立体的で現実的な月経不浄観の在り方が浮かび上がってくるのではないかと考えた。

それゆえ、実地調査を行った、東京都の青ヶ島と沖縄県の宮古島の事例研究を骨子としてこの論考を進めていく。

## 一 青ヶ島における月経不浄観の実態

### 1 概況

青ヶ島は、東京の南三五七・七km、八丈島から六七・七kmの太平洋上に浮かぶ伊豆諸島最南端の火山島である。面積は五二・三km<sup>2</sup>、周囲は約九km、一九八六年現在人口二一人<sup>(5)</sup>という小さな島で、良港に恵まれず、長い間周囲から隔絶されてきた。現在でも、週に三回の船便（四九tの小型船による）だけが唯一の交通手段で、それも海が荒れ

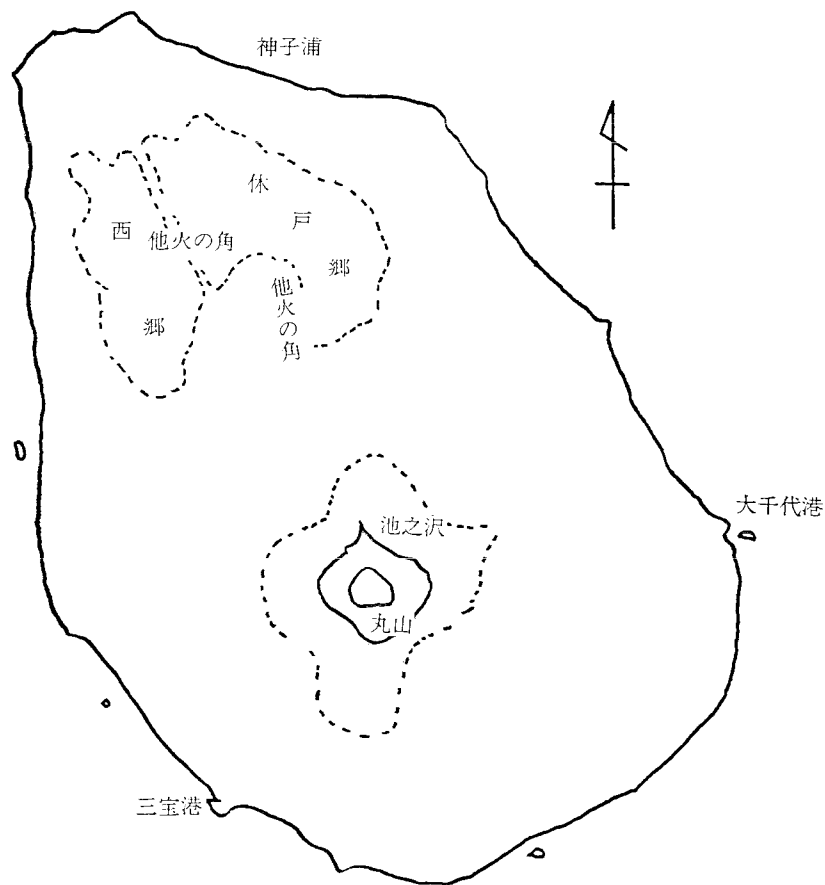


図1 青ヶ島略図

ば欠航してしまうという状態である。

ただ、古来から八丈島との交流はあり、様々な地域・社会階層の流入がもたらした多様な文化の混在する八丈島の文化の影響を受けたものと思われる。

現在、農業も漁業もそれ自体で生業として成立っているとは言いがたい、人々の生活を支えているのは港湾、道路の工事等の公共事業である。

昔から漁は男の仕事と言われ、男性上位の気風があると言われた。しかし、畑仕事をこなしているのは専ら女性で、公共事業にも参加する等、女性の経済的自立性はかなり高いと言えそうである。

## 2 社会構造

ここで社会構造について詳しく説明する紙面はないが、後の結論考察への要素提出のために、必要と思われる点だけを述べる。

- 一、島内婚で、嫁は実家の目の届く所におり、婿と嫁の実家の関係が何かにつけて強調される傾向があった。
- 二、別居隠居制があり、イエの規模が小さい。
- 三、親類関係を媒介とする妻<sup>11</sup>母方親族が、シンルイの主体を構成しており、シンルイの構造は、父方・母方の区別がなく、双方に拡大した近親者によって構成さ

ニンが一組で行動している。

ミコには普通ミコケ、カミケ等と呼ばれる要素を持つ女性になる。これはミコになるべき人が生来持っている一種の超自然的感覚であり、彼女らはカミシブレと呼ばれる巫病にかかることが多い。また、これは女性に限ったことではなく、男性がかかることもあり、この場合、その男性はシャニンとなる。カミシブレはカミが呼んでいるのであり、その呼びかけに答えてカミソーデというカミを憑依させる入巫儀式<sup>(8)</sup>を行い、神役になれば、カミシブレは嘘のように治まるといふ。

ミコケは普通月経閉期以降に徴候が現れるというが、月経がある女性でもミコケを示す場合もあり、ミコになることができる<sup>(9)</sup>。

月事の間は、しかし、他の女性と同様に忌まなくてはならず、神事には参加できない。

カミソーデが終わり、正式に神役になるとミコもシャニンも自然に肉食を一切しなくなるし、不浄なものに対して非常に敏感になるという。ニワトリの屠殺等にも一切関わらない。神事の厳しい制約に、強制されなくとも自然に従うようになるのだという。

ミコとシャニンからなる神役集団には現在は厳密な階級区分はないらしい。ただ、各人の神事の熟達度と能力から

れている等々、いわゆる『西南日本型村落』的社会構造と言えるだろう。

これは、『原理的、意識的には男性優位でありながら、それが、様々な要因に阻まれて一貫した形では社会関係を決定していない』と波平が評した社会構造と一致する。

## 3 宗教の特徴

青ヶ島には神社と呼ばれるものが八つあるが、それらは「宗教法人」としては登録されていない。この島における神社信仰は民間信仰との間に境界線がなく、両者が混然一体となって独特な信仰形態を構成している。不浄を祓うために「湯立て」をし、ミコが「南無妙法蓮華經」を唱えることもあり、神前で「般若心經」が読み上げられる場合もある。このように例を挙げていけばきりが無いほど、青ヶ島の宗教には、神道、仏教、民間信仰の様々な要素が混在しているのである。

青ヶ島では、各神社に専属の神職がいるわけではなく、シャニン（舍人）とミコ（巫女）とからなる神役集団が、神事その他、各家の私的な占いや祓い等すべてを司っている。

現在はミコ一人、シャニン五人である<sup>(7)</sup>。常に全員で行動しているわけではないが、神事の際には必ずミコとシャ

「有能な人」「上の人」という意識はある。

神事において、ミコは神懸かりをし、シャニンは祭文をあげ、太鼓を叩くという役割区分がある。しかし、シャニンでも「男巫女」と呼ばれるほど神懸かりする人もあるという。

文献では、シャニンをミコの補佐役的存在として述べているものが多いが、ミコたちに聞くと、シャニンの方が位が上であるという回答が返ってきた<sup>(11)</sup>。

青ヶ島の宗教の特徴としても一つ上げられることは、神々に対する強い畏怖の念であろう。行方不明の子供を捜してくれと頼まれたシャニンが神様を拜んで靈感を得たが、その子が死んでいたために災いが自分に降懸かった例など、神々に対する行為、祀り方に常に気を配っている。その方法において何か失敗をすれば罰があたると考えられている。

## 4 人生儀礼と月経小屋

### a 月経小屋の機能

青ヶ島では血を不浄なものとして忌避する観念が非常に強い。そのため出産や月経は不浄と考えられる。そして、そのようなケガレた時期はケガレが伝染しないように、ケガレていない人々から離れて生活しなければならなかった。そのケガレに対する恐れは尋常ではなく、例えば、かつて

は、分娩の際にも他の人にケガレが懸からぬよう、野外で一人で産み落としてから母たちを呼ぶ。呼ばれてやってきた人は産婦と生児には全く触れず、杓で湯を産婦の手に注ぎ、食べ物や渡す時も、産婦のてにカンジョシバ（アジサイの葉）をのせてその上に受けさせたほどである。

青ヶ島にはそのような時期にある女たちがこもって暮らす為のタビ小屋（他火小屋）が昭和四十二年頃まで存在していた。昭和初年から四十二年までは個人のタビ小屋であったが、それ以前は村ごとに一つずつ共同の小屋があった、様々な年齢層の女たちが入替わり立替わり一つ屋根の下で暮らしていたのである。

青ヶ島の女性にとってタビ小屋は一生のうちのかなりの時間を過ごす場であった。と同時に誕生、初潮、出産という人生の節目と密接に関わる場でもあった。

月経の第一日目はデトガーと言って不浄とはみなされないで、女性は家族と共に母屋で食事をしてから、日用品と食糧を持ってタビ小屋に入った。生理期間中は針仕事や機織り等をして過ごす。生理があがっても翌日は一日タビ小屋にとどまって、湯を浴びて夕食を食べてから、「三日屋」という別小屋に泊まった。三日目からは畑仕事に出て良くその日は家に帰って「縁の間」で寝た。四日目はヨーカスギと言って、朝食からすべて日常生活に戻ったのである。

見れば、いろいろな女性とひとつ屋根の下で過ごすことになる。これは、男のいない所で様々なことを話す機会が村の女たちに与えられることとなり、それが村社会の諸事に影響を与えることもあっただろう。

しかし、女同士の年功序列的な関係も自然に生じ、その様な面では苦勞もあつたことだろう。ともかく、タビ小屋は単に忌避された女性が集まる場所というだけでなく、多様な機能を有していたのである。

#### b ウェイデー（初出）の祝い

昭和三十年頃まで、少女が初潮を迎え、初めてタビに行く時には、ウェイデーまたはハツタビと呼ばれる祝いをした。娘がタビ小屋から帰ると、娘の家では米飯とウドン、干し魚、煮しめ等の料理を用意し、若い衆を招いて祝った。若い衆も薪等を伐り、タビ小屋に届けて軒下に積み、娘の成長を祝ったのである。

この初潮祝いは女性にとっては、結婚式よりも盛大に祝ってもらえる一生で最も大きな祝い事だったという。

ちなみに男性には女性のウェイデーに当たる様な成人儀礼はなかった。ただ昭和初年頃まで十四歳～十八歳頃の若者が仲間数人で各自の選んだ家に泊まり、共同生活をする風習があった。これをモウリ宿といった。

タビ小屋を機能の面から考えてみると、まず第一に血のケガレがある人間を完全に隔離してしまうことによって、家族の日常生活に禁忌が及ばないようにするということが上げられる。女手が一時なくなると言う労働面でのマイナスはあるが、炭焼きや漁等血のケガレを忌む生業を営まなくてはならない夫は、妻もしくは娘の生理やお産でケガレが懸かると言う気遣いはしなくてよい。また多くの神役がごく普通の家庭生活をいとなんでいることを考えると、多々ある「神様拜み」に嫁や妻、娘の血のケガレによる支障がないようにすることは大事なことであったに違いない。

事実、現在はタビ小屋がなくなってしまうているため、ミューシャニンはうっかりケガレている人と合火するのを避けるため、決して他家ではお茶も飲まない。

第二には、生理中で体がきつい女性を通常の重労働から解放するという意味があった。

第三に、共同のタビ小屋の場合にはハツタビ（初潮）の娘から五十過ぎの女性までが一つの小屋で過ごすので、娘たちは様々な女の知識をここで教えられ、また年長の女性たちは、息子の結婚相手として気に入った娘を密かに選んで息子に告げたりもしたらしい。月経はほぼ一定の周期で巡ってくるので、だいたいいつも同じ人と一緒にいる。と同時に人によってその周期に長短もあるので、長い年月で

#### 5 青ヶ島の月経不浄観

以上、大変おざっぱに青ヶ島の状況を説明してきたが、はじめに述べたような月経不浄論でこの青ヶ島の月経不浄観を説明できるだろうか。

青ヶ島の村落構造はいわゆる「西南型」であるし、宗教の面においても沖繩のようなほぼ完全な女性中心の祭祀ではなく男女がそれぞれの役割を分担して互いを掬いつつ神事を行っている。それらを大きく捉えれば、確かに波平の述べたような状況にあるといえるかもしれない。

しかし、実際に現地で詳しい調査を行ってみると、それらの要素が青ヶ島の月経不浄観を生み出したとはどうしてもしえない面が出てくる。

まず、この島の月経不浄観がダグラスや波平の言うような「性の不浄観」であるとは思えないということである。

「性の不浄観」とは、女性の属性としての月経（出産を含む）を不浄としてとらえ、男性にとって危険な力となりえると考えられる不浄観であろう<sup>(13)</sup>。

しかし、青ヶ島では、少女の初潮を村全体で祝っていたのである。これは女としての属性——生殖能力を獲得し、一人前の女性になったことの祝いであった。女性の属性を忌む所にこのような発想が生じるだろうか？

また、非常に強い血の不浄観があることは先に述べたが、月経や出産が特に男性に対して危険である、という意識はない。血のケガレを忌まなくてよいのは、同じ時期にタビ小屋にいる女性だけで、他の人は老若男女の区別なく血のケガレを忌避しなければならないのである。むしろ、『特に』月経を忌まなくてはならない人というのはミコとシャニンなのである。これらのことをふまえた上で、次の調査地の例を上げ、結論に導いていきたい。

## 二 池間島における月経不浄観の実態

### 1 概況

池間島は沖縄県宮古島の西北端、西平安名崎より約四kmの海上に浮かぶ、周囲一二km、面積二・七七km<sup>2</sup>の平坦な島である。

池間島は宮古島の属島であるので、まず、宮古島のことを述べておくべきであろう。宮古群島は、琉球弧のほぼ中央に位置し、沖縄本島から約三二六kmの距離にある。沖縄本島および石垣島からの交通機関としては、飛行機が那覇からは日に九便、石垣からは日に二便飛んでいる他、海上交通として那覇新港、石垣港から、週に約三便がある。

宮古本島の人口は一九八五年現在四九四八六人、平坦な

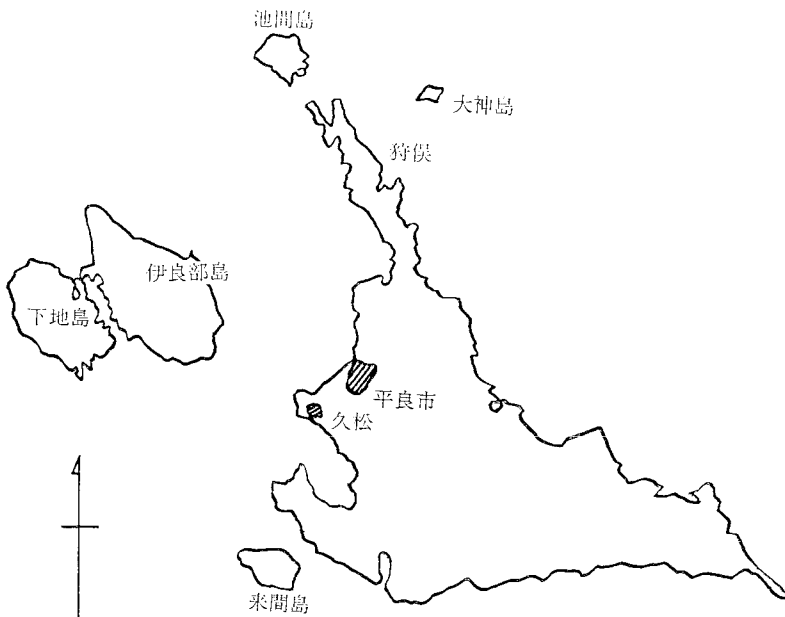


図2 宮古島略図

地形で気候の変化は少ない。<sup>(14)</sup>

池間島の人口は一九八五年現在一一七二人。<sup>(15)</sup> 少なくとも十六世紀初頭には現在と同じく平良と同じ行政区域に属していたという。<sup>(16)</sup> 池間にある大主御嶽（オハルズウタキ）は宮古中のウタキの神々の発祥の地であるという創世神話を有している。

現在、この島の主要生産物はサトウキビであるが、農業は二次的なものになっており、ほとんど女仕事である。一方漁業は、池間島の周囲に好漁場があるため、古くから盛んであった。明治四十年代に日本本土から大型船による遠洋カツオ漁業が宮古島に伝えられ、それ以来現在まで（当初より漁獲高は減少しているが）池間島の重要な生業となっている。

### 2 社会構造

池間島の社会的な面で結論考察に係わる要素を拾い上げてみると、

- ・ 遠方婚ではなく島内婚で主であった。
- ・ 訪妻婚があり、夫の家への妻の帰属がひき伸ばされる傾向にある。
- ・ 村内運営に関しては男性主体である、祭祀に関しては女性主体である。

・結婚前に比較的、性的自由が認められていたので、女性  
は性的手段として若者の力関係を定める可能性を持っ  
ていたと言えるかもしれない。

・別居隠居制はなかった。

等々、青ヶ島と同じように、やはり原理的には男性優位  
でありながら、様々な要素がそれを阻み一貫した形では社  
会の在り方を決定していない『西南型村落』の構造である  
と言えるだろう。

## 2 宗教の特徴

池間島で信仰されている神々は非常に多く、この論文で  
それらの名と性格を記すことは出来ないが、それらは主に  
自然神、土地（地域という意味も含む）の守護神、職能神  
である。

部落レベルの信仰としてはオハルズウタキの信仰が上げ  
られる。オハルズは、池間では最も大きな森の中にあり、  
中央正面の石垣から奥に入ってはならないという聖地であ  
る。

池間で行われる神願いは大きく分けて二種類あり、神役  
であるツカサが関与して行なういわば島全体を対象にした  
公的な神願いと、病氣や家の新築の時等の私的な神願いで  
ある。

宗教が島の精神生活の重要な柱となっている池間では、  
時代を遡れば遡るほど祭祀を司るツカサンマの地位は高く、  
区長など行政に携わる男たちと同等の強い立場にあった。<sup>(17)</sup>

池間島のツカサは五人で構成されている。

最高位のフヅカサ、神懸かり専門のカカランマ、フヅカ  
サの助手的役目のナカヅカサ、小間使的役目のトモツカ  
サである。

彼女らは廃藩置県後は、部落のユークインマ（ユークイ  
という行事に参加する五十一歳から五十五歳までの女性）  
以上の全女性からフズウルシというくじで選出される。ツ  
カサンマは日常生活にまで及ぶ制約を課せられる。

### 二、三例を挙げると、

・フヅカサは頭上運搬してはならない。

・ツカサはいつも裸足で歩かねばならない。

・フヅカサは部落内でも一人で勝手に出歩かず、いつもツ  
カサの誰かが家に来ていてお供をして出る。

等々、ツカサ、特にフヅカサを一般の女性と区別して権  
威づけ、神聖化しようとする傾向が非常に強い。<sup>(18)</sup>

また、彼女らは、神事を全ての私事に優先させ、島の平  
安を保つような心がけなければならない。ゆえに特別な職業、  
例えば産婆等でその人を欠くと部落の人々が困るような場  
合には、最初から神役につくことを断らねばならない。神

願いの最中にお産が始まったからと言って、神願いを中断  
するわけにはいかないからである。

もうひとつ池間の信仰を特徴づけているのはワーガンニ  
ガイ（ワーは豚のこと）であろう。池間では異常死（怪我  
死、水死、自殺など）をギガズンと呼んで非常に嫌うが、  
例えば、水死体を抱き上げた人などは必ずこのワーガンニ  
ガイ（願い）をしなければならぬ。

これは、豚を殺して神に捧げるので、大変費用のかかる  
最大の不浄払いと考えられている。

## 3 池間島の月経不浄観

通常、沖縄は月経不浄の観念が薄い、あるいは全く存在  
しないといわれている。

しかし、池間島の場合、大変かすかにではあるが月経を  
不浄とする意識があるように思われる。

例えば、池間では、月経中の女性は畑に入ってはならず、  
入ると黒穂になり粟が不作になると言う。また、漁具を月  
経中の女性が触るのを嫌うと言う。

しかし、神事においては青ヶ島のように血のケガレを忌  
むという意識はあまり見られず清浄さを要求され、厳しい  
規範を課せられているツカサンマは月経中でも（通常、月  
経閉期後の女性がツカサンマになるが、これは月経を気に

してというわけではなく、この時期になると、主婦として  
の責任からほぼ解放され神事に専念できるからだという。

ゆえに、稀にはあるがまだ月経があがっていない女性が  
ツカサンマになることもある。神事を休むということとは  
ない。「神事は全ての私事に優先するので、月経でもしか  
たがない。」と言う。つまり、月経を完全に私事としてと  
らえているわけである。……この意識は、初潮を盛大に祝  
う青ヶ島の月経に対する意識とはかなり異なっているよう  
に思う。ちなみに、池間島でも宮古島の他の地域でも初潮  
を祝う風習はなく、親が娘がいつ初潮を迎えたか知らない  
場合も多いという。

では、なぜ池間島に月経を不浄とする意識が生じたのか。  
立証しうる証拠はなく、あくまで推論でしかないが、考  
慮すべき条件が三つ存在する。

まず、第一は正統時代に本土から大型船による遠洋・近  
海のカツオ漁の技術が導入されたという事である。カツオ  
漁は非常に血のケガレを忌み、特に女性の赤不浄（月経、  
出産）を嫌う。この意識が日本本土から技術と共に入って  
来た可能性は高い。事実、池間島で特に産の忌み懸かった  
家をアカチャーとして嫌うのはカツオ船の乗組員であると  
いうし、産婦の夫はサバニ（一人乗りの小船）で漁にでる  
のは一向に構わないがカツオ船に乗るのはサウズビヤリ

（忌み明け）までは遠慮するという。

しかし、これから述べる宮古島の久松にも同時期にカツオ漁が入っているにもかかわらず、久松には全くと言っていいほど月經不淨観がない。

第二には、先程池間島では血をさほどケガレとは意識していないように述べたが、むしろ血にある種の呪力を意識していたように思う。例えば、トゥクヌヌカンニガイといって、かつて家を建てる時、棟上げの前に豚を殺し、頭を玄関の前に埋め、四つ足は家の四隅に埋めて、家の繁栄を祈り、血は壁に塗ったという。何か不幸な事があると再願いをしたという。また、久松でもそうだが豚の骨つきの生肉を吊るして外から悪いものが入って来るのを防ぐ、日本本土の『道切り』に似た行事もあり、神役に就くと肉食をしなくなるといふ青ヶ島とはだいぶ趣を異にする。

第三には、池間島は神事に気を使う島であり、諸事に亘って禁忌が存在する所であるということである。先程ワーガンニガイについて述べたが、死のケガレや不吉な予兆等にもかなり気を使う。神役が守らねばならぬ規範も宮古島の他の地域と比べてもかなり厳しい部類に属している。

これらの三点を考え合すると、当初、何か呪力を持つと意識されていてもケガレではなかった血が、『月経はケガレ』という本土の習俗の影響でケガレと意識され始めたの

ではないか。……呪力を持つと意識することは、それに危険と力の両面を意識しているものであり、それはまさにM・ダグラスが述べたようにケガレの本質に非常に近い性格のものであるから、カツオ漁の影響が直ちにそのような形で受け入れられたとしても不思議はない。

それに加えて、この島は不吉、予兆、ケガレに対して非常に敏感な所であり、その意識が他の地域より深刻に受け取られ、残ってきたのではないかと考えるのである。

### 三 宮古島久松における月經不淨観の実態

#### 1 概況

久松部落は、平良市街地より南方約三・五kmの地点の与那覇湾口にある。久松という名称は久貝と松原という二つの部落を一学区として呼ぶための名称で、私は松原部落で調査を行なった。

松原は十四、五世紀頃に形成された村落であろうといわれ、久貝は松原より後に伊良部村長山からの移住民によって形成されたといわれている。

久松の人口は一九八五年現在二、四〇五人（松原七八六人、久貝一、六一九人）で、純然たる半農半漁の村である。農業はサトウキビ栽培を基幹に、ニンジン等移出生産品が

栽培されている。また馬、豚、ヤギ等の飼育も行なっている。男も女も共に畑で働いているが、現在は老夫婦の働く姿が目立つ。

松原は、与那覇湾という沖縄近海でも有数の漁場に面しており、しかも大量消費地である平良市街地が背後に控えているため、漁業が盛んで、漁業収入が農業収入を補っている。

漁法は小型舟サバニによる沿岸漁業と明治四〇年代に日本本土から導入された近海ないし南方のカツオ漁業の二本立てで営まれていたが、カツオ漁のほうは昭和三十年以降衰退が激しく、現在は営まれていない。

漁を行なうのは専ら男だが、それを島内へ供給するのは女の仕事で、行商や市内の公設市場に卸して収入を得ている。

こうして、伝統的に商業に慣れ親しんできた女たちは、商才に優れ、家庭の経済を支える大きな力となっている。

## 2 社会構造

久松の社会も他の二例と同様に

・村内婚で、嫁は実家の目の届く所にいた。

・親族組織については、大本憲夫が詳しい論文を書いているが、それによれば久松の親族組織は、祖先中心的な父

系の出自関係であるサニピットと、個人を中心として父方母方に展開する双系的な関係であるウヤクがあるが、日常の社会生活の中ではウヤクの親族関係の方が強く結合するとしている。

・村運営に関しては男性主体であるが、女性も婦人会等で集団組織を有する。

等々、やはり、『西南型村落』的社会構造を示していると言えるだろう。

#### 3 信仰形態

松原の信仰はおおまかに考えて、部落レベルの祭祀と里レベルの祭祀、個人祭祀の三つのレベルから成立っている。部落祭レベルではウタキ（御嶽）とウガンジョ（拝所）を里レベルではサトゥヌカン（里の神）を個人ではトゥクルヌカン（屋敷神）と祖先神を主に祀っている。

部落レベルの祭祀者は、最高位のユーザスとユーザスの助手的存在であるツカサであり、この二人で祭祀を司る。

それに加えて、回り番でウガン（拝み）の手伝いをするツカサドモがあり、これは五十六歳（かつては四十六歳だった）の部落の女性全員がなる。

祈願ごとに行われることは様々であるが、ユーザスは神との交渉、神歌を唱えるなど、祭祀の実質的遂行者であり、

ツカサは各神様への供物を捧げることを役割の中心として  
いる。

これら、ユーズス、ツカサ、ツカサドモはいずれも女性  
に限られているが、ピューズドラと呼ばれる暦役（年間  
三三のウガンの日取りを決める。）や、ウガンの際の事務  
的な処理や、神役の後継者の選出に責任を負う等かなり重  
要な役をカントクと呼ばれる男性が果たし、ガンザ、ユク  
ミ等と呼ばれるウガンジョ（拝所）の清掃や祭祀道具の保  
管をする係りも男性がやる。

つまり、神との交心や祈願等、精神的な部分は女性が司  
り、ウガンに伴う様々な事務的な仕事を男性が行なってい  
るのである。

また、久松では、宮古の他の地域……池間島や狩俣、大  
神島<sup>(23)</sup>の様に、ウガン等の最中に神役以外の人が入ることを  
さして気にしない。

入るのを遠慮するのは、ブソウズ（不浄と訳してもいい  
と思う）の人であるが、これは死のケガレが懸かっている  
人とお産のソーズバリ（忌み明け）前の人で、月経中の女  
性は含まれていない。

また、現在松原には、二三のサティ（里）と呼ばれる、  
小さい所で数戸、大きければ二〇戸程の地縁集団があり、各  
里ごとに里の神を祭っている。この里レベルの祭祀者は、

はできないが、細部はともかく、明らかに違うと思われるた  
点は祭祀の在り方であった。……池間島の場合は前記のよ  
うに、禁忌の觀念が強く、それらを守らねば災厄が襲って  
くるとする意識が強かったのに対し、久松の場合、ウブド  
マールと呼ばれるウタキ（御嶽）の中から、何かを持って  
来てしまうと皮膚病になるという言伝え以外、カミが罰を  
当てるという話を聞かなかった。

また、神役に対する行動規範も久松には池間島ほどの厳  
しさはない。このような禁忌、もしくは祭祀に対する厳格  
さの度合いの違いが、不浄観の強弱に影響を与えている可  
能性は大きいように思う。

#### 四 結論

以上、三つの調査地における事例を簡略に述べてきたが、  
当初の疑問点は、次の二点であった。

・月経不浄観が、社会における男女の関係、特に、男性優  
位女性劣位の在り方によって生じる（もしくは、強弱の  
バリエーションが生じる）、性の不浄観と称されるべ  
きものであるかどうか。

・月経中の女性が課せられる禁忌の多さ、厳しさ、月経が  
危険とされる度合いが、社会、宗教内での女性の地位な

部落の神役と同じように、フズウルシと呼ばれるくじによ  
って選出される仕組みになっている。

#### 3 久松の月経不浄観

久松では、自分の娘がいつ初潮を迎えたか気づかないと  
いうほど月経に注意をはらわないし、先程述べたようにウ  
ガン（拝み）に際しても月経中の女性を忌避するという意  
識もない。つまり、全く月経不浄観が存在しないのである。

先程も記したが、久松も池間島とはほぼ同じ時期に大型船  
によるカツオ漁を日本本土から導入している。現在ではほと  
んど行なわれなくなったとはいえ、例えば出産の場合等は、  
カツオ船の乗組員はアカチ（赤血）のケガレが懸かるのを  
忌んで忌み明けまではお産のあった家には寄らなかつたとい  
う<sup>(24)</sup>。しかし、アカチのケガレ等と言うわりには、その当  
時も月経については全く無頓着だったようである。

こうして考えてみると、やはり、血に対する不浄観は、  
始めからあったものというよりは、後から入ってきたもの  
と考えたほうがいいように思う。

では、なぜ久松では池間島と同じような程度での月経不  
浄観さえも存在しないのだろうか。

宮古島の場合、各部落ごとに祭祀の形態や風習、社会構  
造の在り方等かなりの違いがあり、一概に比較すること

どに直接影響するものであるかどうか。

まず、社会構造と月経不浄観との関係だが私の調査した  
三つの地域は、皆、基本的には大森元吉や波平恵美子が  
『性の不浄観』が強いとした、『西南日本型』の社会構造  
に属している。しかしこれまで見てきたように、この三つ  
の地域の月経不浄観の強弱はまちまちであった。（表参照）  
では、波平が述べたように、沖縄の場合は、同じ『西南  
型』であっても『聖の領域と俗の領域で明確に区分され、  
聖の領域における女性の優位性、俗の領域における男性の  
優位性が明確で、その間に矛盾がない』ので、青ヶ島と異  
なって月経不浄観が薄いのだろうか？

しかし、前章までで見てきたように、久松と池間島の祭  
祀・社会の在り方を見てきた限りでは、池間島の方がはっ  
きりと上記の条件にあてはまるが、月経不浄の意識は池間  
島の方が久松よりははっきりと現れていたのである。

また、青ヶ島の場合を考えてみると、聖の領域において  
女性にカミケと称する能力を認め、カミをノセられる者と  
して重要な地位を与えていながら、男性にも祭祀者として  
重要な地位を与えているというように、明確にどちらが優  
位かを区別しない複雑な状況にあるが、それを単純化し、  
明確化するために月経不浄観が生じたとは考えにくい。

なぜならば、月経不浄観は青ヶ島においては、女性その



ものを不浄なものとして神事の場合から追いつ出するためには役立っていないからである。

M・ダグラスや波平の理論は、仏教や修験道等の男性祭祀集団の確立と維持のために強調される女性不浄観にはあてはまっても、青ヶ島の場合のような、それ自体としては非常に強い月経不浄観を説明する役には立たないのである。このことは、月経不浄観を「性の不浄観」として解釈することが必ずしも妥当ではないという側面を提示している。つまり、女性の属性としての月経を不浄とし、それゆえに女性は、たとえ月経以外の時でも不浄な存在として忌避される、女性不浄観とイコールの月経不浄観と、月経というものが一種の異常な状態であり、また神事において不浄視される血と密接に係わるために不浄として意識され、その時期にある間だけ忌避される月経不浄観があるように思うのである。

そして、従来それが混同され、ただ「月経不浄観」という一つの観念として取扱われてきたために、男女の社会的な位置や力関係がその主な原因とされ、月経不浄観が強いことがその社会・宗教内における女性の劣位・排除とイコールであると考えられてきたのだから。

しかし、月経不浄観と一口に言われる観念の中にも、その地域・状況ごとにかなりの意識の違いがあることを認識

れば、そこには「性の不浄観」としての月経不浄観が浮かび上がってくるであろうが、私はむしろ、広範な血穢の中に含まれていた月経のケガレが、特に強調されてきた過程にこそ、男性と女性の葛藤が明確に、しかも決定的な要因として関わってくるように思うのである。

しかも、そのように月経が強調されてくる状況の中でも、必ずしも男性優位・女性劣位という意識のみが関わっているとは限らない。月経が生命の誕生に密接に関わる、一種異常な状況として意識されている場合にも、その異常さが危険なものとして不浄観へと移行する可能性も大きいのである。特に、常に危険を回避することに気を配り、数多い禁忌を守って生きている社会の場合、その可能性はより大きくなる。

月経には、

- ・ 血と密接に関わること
- ・ 出産能力に関わること
- ・ 女性のみの特性であること

という三つの要素があり、それぞれをどう意識するかで、様々な解釈が現れてくるわけである。

例えば、職業等でも月経を特に忌避する職業としない職業があるが、これなども山仕事や漁業など常に命に関わる危険を意識しつつ行なう職業や、ほんのわずかな違いで製

しないかぎり、適切な解釈はなされえないであろう。

では、月経不浄観はどのような要素から構成されてきたのだろうか？ 私が見られた、日本に於ける資料から考察した限りでは、基本的に月経が不浄として強く意識される要因は、

一、血を不浄なものとして忌避する意識が強いこと。  
二、月経を成女の徴として祝う等、月経自体になんらかの価値を持たせて考える傾向があること。

三、宗教が日常生活に強い影響力を持ち、しかも、守らねば危険であるというような禁忌が数多く意識されていること。

の三点であろうと思う。

血の不浄観というものは、単に月経・出産等にも関わるものだけではなく、怪我や鼻血、殺生等にも関わってくるものである。例えば日本本土では仁寿元年二月に「血鼻穢」による園韓祭官人交替が記されているし、その様な例はかなりある。

一方沖縄では、そもそもそのような血の不浄観が薄い、もしくはまったくない。そういう状況であるのに、月経不浄観の有る無しを祭祀形態内の矛盾のない女性上位に原因を求めるというのは、かなり無理がありはしないか？ 血の不浄観よりも先に月経不浄観が存在したという証拠があ

品の出来不出来が決まってしまう炭焼き等、不安な要素が多い職業はど月経不浄を気にするように思う。また、農作業等は昔から男女が協同行なってきたものであるが、漁撈や狩猟炭焼き等は、大抵、男の仕事であることが強調され、しかも生業の守り神が海の場合も山の場合も女神であるケースが多く、その神が嫉妬するので女が生業の場に立ち入ることを嫌う場合が多い。

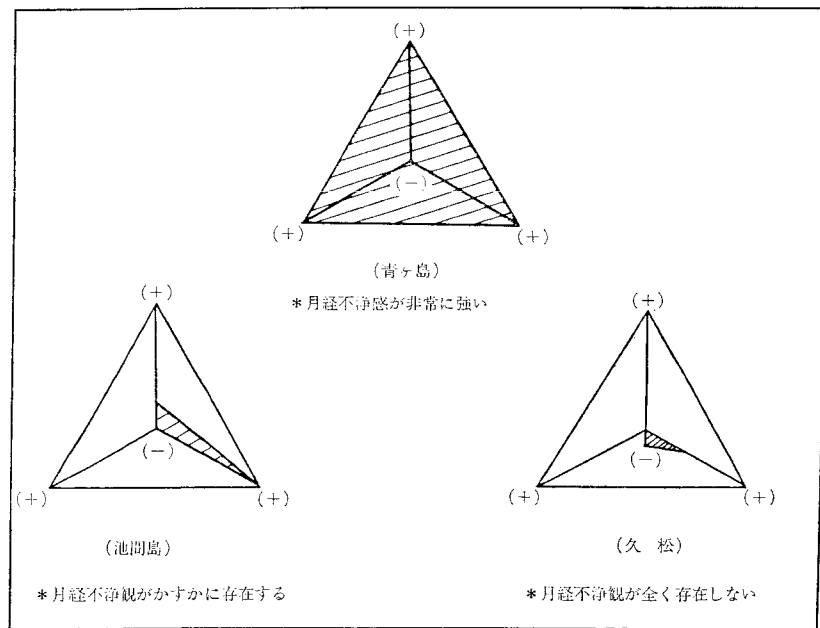
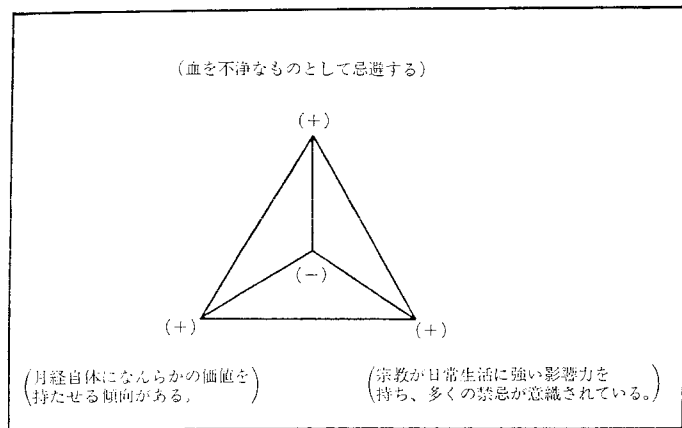
このような諸事情が月経を様々な解釈し、意識し、女性の忌避にもつながる不浄観を生み出していったと考える方が、村落構造から月経不浄観を解釈するよりもはるかに実状に近い解釈をしえるように思うのである。

また、このような不浄観を強調する意図の多様さが、月経不浄観というものを複雑で見えにくいものにさせてきた原因でもある。

しかし、一つ一つの社会状況、宗教の性格、信仰の在り方、生業における意識等を綿密に考察していけば、その地における月経不浄観がどのような過程を辿って成立し、どのような意味を持っているのか、その立体的で実状にそった在り方が浮び上がってくると思われるのである。

終わりにあたって、今まで懇切丁寧な御指導を賜った諸先生方、特に調査にあたって懇切丁寧に御指導下さいました植松明石先生、大本憲夫先生、そして、常に励まし、適切な

社会構造	青ヶ島	池間島	宮古島久松
西南日本型村落	西南日本型村落	西南日本型村落	西南日本型村落
宗教の在り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性、女性共に祭祀を司る。</li> <li>・血を不浄として忌避する。</li> <li>・神に対して守るべき規範、禁忌が非常に多く、守らなければ災厄が襲うという意識が強い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・祭祀は、ほぼ女性が司る。事務的な面に男性が関与することがあるが、ツカサンマの権威が強調される傾向がある。</li> <li>・血に呪力があるとする意識がある。また、血をケガレとする意識もかすかに存在する。</li> <li>・神に対して守るべき規範、禁忌が多く守らねば災厄が襲うという意識が強い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・祭祀の精神的な面は女性が司るが、事務的な面には男性も関わる。</li> <li>・血に呪力があるとする意識がある。</li> <li>・神に対して守るべき規範はあるが、他の二地域よりは、かなり緩やかで、祭祀の在り方も解放的。</li> </ul>
女性の経済的自立性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農作業、公共事業ともに参加し、経済的自立性は高いといえるだろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農作業を受け持ち経済的自立性は高いといえるだろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農作業、海産物の行商等を行ない、経済的自立性は高いといえるだろう。</li> </ul>
月経不浄観の在り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月経を不浄とする観念が非常に強く、その時期にある女性は不浄とされ、神事への参加神社への立入りを忌むが、その他の時は忌避されることはない。</li> <li>また、初潮は成女の徴として祝う風習があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月経中の女性が畑に入ると粟が不作になると言い、漁具に触れる事を嫌う等、かすかにではあるが月経不浄観が存在する。しかし、月経中でも神事に参加できる。初潮を祝う風習はない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月経を不浄とする観念も、成女の徴しと考える意識も存在しない。</li> </ul>



(図3)

(月経不浄観の強弱と三つの要素との関係)

御教示を与え続けて下さった青柳真智子先生に、心から厚く御礼申し上げます。

また、お忙しい中、訪れる度に親切に調査に応じて下さいました、青ヶ島、宮古島の皆様に、この場を借りて心から感謝の意を表します。

註

- (1) 大森元吉、「血忌習俗の分布について」『社会人類学』、三一、一九六〇
- (2) M・ダグラス、塚本利明訳、『汚穢と禁忌』、思潮社、一九八五（一九六九）、p.p. 二六四—二九三
- (3) 波平恵美子、『ケガレの構造』、青土社、一九八四、p.p. 二三九—二四一
- (4) 同書、p.p. 二四一—二四二
- (5) 「青ヶ島村勢要覧」『東京都青ヶ島』、一九八六、による。
- (6) 波平は前掲書において、『西南型村落』が『性の不浄観』が強い理由を
  - 一、家の中での、夫の妻に対する優位性、家長の嫁に対する優位性は、東北型に比べると次のような理由ではるかに弱い。
  - 1 遠方婚ではなく村内婚であり、妻ないし嫁は常に自分の実家の人びとの直接、間接の保護のもとにある。
  - 2 妻問い婚などに見られるように、夫は妻方へさまざまな形での奉仕や、結婚後も妻は夫方のためではなく実家のために働くなど、妻の夫の家への帰属がひき伸ばされる傾向がある。
  - 3 家の規模が小さく、さらにまた、隠居制などによって、

であるという。さらにカミソデーの時、櫛に魂を入れる儀式を行なうのはシャニンの最年長者である。

(12) 青ヶ島には休戸郷と西郷という二つの郷がある。

(13) 例えばニューギニア高地のマエンガ族は男と女は分れて居住し、男の子は五歳位になると出来るだけ女から離れていなければならないことを学ぶ。男性は月経血を非常に恐れ、もし月経血や月経中の女性に触れて、対抗呪術を講じなければ、彼は絶間なく吐き、血は黒くなり、生命の源の液は汚れ死んでいくと信じられている。

(14) 『宮古島の概況』、平良市役所企画室、一九八六、による。

(15) 同右

(16) 野口武徳、『池間島民俗誌』、未来社p. 二九、一九七二

(17) ツカサの歴史については野口の前掲書に詳しい。

(18) 野口武徳、前掲書、p.p. 二一七—二一八。フツカサの「フ」は「大」を意味する。

(19) ザーグルという年末に行なわれる厄払いの時に行なわれる。

(20) M・ダグラス、前掲書、p.p. 一八四—二一六

(21) 『宮古島の概況』、平良市役所企画室、一九八六、による。

(22) 大本憲夫、『沖繩における年齢階梯制—平良市久松の年齢階梯制とその解体』、『民族学研究』、四—一、一九八〇

(23) 狩俣と大神島と島尻にはウヤガム（祖神）祭りという秘祭があり、この祭りの時、女性の神役は山にこもって神事を行なうが、男性はもちろん、一般の人間はそれに参加すること

も、見ることも許されない。また、大神島のウタキには普段の時でも余程の事がない限り村人さえ入るのを遠慮している。

(24) お産は確かに久松でもブソウズであるというが、同時に外

夫婦単位での関係が家の中心になりやすい。  
二、父系原理が、東北型に比べてはるかに弱い。——後略——  
三、女性の経済的自立性が高い。——後略——  
四、村運営のほとんどあらゆる面において男性優位、男性主体であるが、娘組の存在や各年齢段階における女性のみの講組織の存在は、女性が集団組織を持ち、そこで発言したり、間接的であっても村の行政に何らかの形で影響を及ぼすことを可能にしている。

五、結婚前に性的自由が認められている、また、場合によっては、婚前交渉が強制されるということは、少なくとも結婚前においては、女性は性手段として男達（若者達）の力関係を決定しうる力を持った。——後略——

等々という要素から説明しているのが、私の調査地の社会構造の問題もこの点に特に気をつけて記述してみた。

(7) この人数はカミソデーをし、オボンナサマと呼ばれるカミを自分の守護神として得、しかも、きちんと神事に参加している人数である。

(8) この儀式は男性がシャニンになる場合も行なう。

(9) ただし、閉経までは社殿の奥の祭壇のある側には入れない。

(10) 酒井卯作、『東京都青ヶ島』、『離島生活の研究』、集英社、一九七五、や、蒲生正男、坪井洋文、村武精一、『青ヶ島の社会組織と民俗宗教』、『伊豆諸島—世代・祭・村落—』、未来社、一九七五等。

(11) 例えば、神事の際、お茶や食事が出てもシャニンの最年長者が箸をつけないかぎり他の者は箸をつけれなかった。また占いの謝礼もシャニンが一万二千円の時、ミコは七千円

部からケガレが入るのを忌む時期でもあり、うっかりケガレを持ち込まぬよう、外部の人間はお産の忌みが終わるまでその家を訪れるのを遠慮したという状況もあった。  
(29) 先に挙げた大本の論文に、久松ではかつてニガズミと呼ばれる籠りを伴う祈願をユーズスの指示に従っていた男性がいたことが記されている。私自身はその事実を聞くことはできなかったが、池間島よりは確かに久松の方が男性が神事に関わる度合いは大きかったように思う。

(24) 山の神、船魂様が女性であるから人間の女性に嫉妬するといふ話は多く聞かれるが、同時に女性の出産能力が豊穣と結びついて意識されるという側面も重要である。

参考文献

- ・大本憲夫、『沖繩における年齢階梯制—平良市久松の年齢階梯制とその解体』、『民族学研究』、四—一、一九八一
- ・大森元吉、『血忌み習俗の分布について』、『社会人類学』、三一、一九六〇
- ・蒲生正男、坪井洋文、村武精一、『青ヶ島の社会組織と民俗宗教』、『伊豆諸島—世代・祭・村落—』、未来社、一九七五
- ・酒井卯作、『東京都青ヶ島』、『離島生活の研究』、集英社、一九七五
- ・波平恵美子、『ケガレの構造』、青土社、一九八四
- ・野口武徳、『池間島民俗誌』、未来社、一九七二
- ・M・ダグラス、塚本利明訳、『汚穢と禁忌』、思潮社、一九八五（一九六九）

参考資料

- ・「東京都青ヶ島」、『青ヶ島村要覧』、青ヶ島村役場、一九八六

月経不浄観と女性忌避（上橋）

・『宮古島の概況』、平良市役所企画室、一九八六  
（立教大学文学研究科地理学専攻博士過程前期過程卒業）